◎特集：学ぶ意欲をどのように高めるのか ― 教養ゼミナール（農芸）の挑戦

教養ゼミナール「農芸」の実践からみえてきた学び

柳川 郁生 | Ikuo YANAGAWA

1. はじめに

〈昨年度の授業実践からみえてきた課題〉

教養ゼミナール「農芸」（以下、この授業）の科目目的および到達目標として掲げられているのは“「土を耕し、生命を育てる」ことを通して、自然を五感で感じ、自分が生きていること、自分が自然の一部であり、他の生命とつながりあっていることを実感する。

そうした生命自然の実感を基盤にしながら自己や芸術デザインについて考え、考えながら土を耕して自然と対話し、思考を深め、自己を確立していくことを目的とする。”であった。

このことに対し昨年度の実践においては授業の進行の中で様々な課題が浮き彫りとなった。

まず初期段階においての主な課題は、

(a) 意欲の出し方がわからない。

(b) 作業の工程が見えていない。

(c) 実際の畑（野菜）の様子が見えていない。

ということをどう改善していけばよいかということであった。

中期段階においての主な課題は、

(a) 事前理解ができていない。

(b) 畑（野菜）のことを知らない。

(c) 作業の意味を理解していない。

ということの改善であった。

後期段階においては、

(a) 畑で起きていること（野菜の成長）が見えていない。

(b) 作業の意味が見えていない。

(c) 本気の愛着や責任感が育っていない。

というようなことへの改善の必要性が主な課題としてみえてきた。

〈みえてきた課題に対する授業での工夫〉

まず初期段階における課題に対しては、まずは一人一人の作業が見つかるよう個別に指示を与えたり、その日に行う作業全体の流れを説明してから展開したりするなど、こちらから学生たちに役割を与えるような働きかけを行うことが多かった。

この働きかけは、学生たちの意欲に直接的に影響を与える即効性は見られなかったが、振り返り（農芸日誌）に書かれたコメントなどからは、自分に不足があることを感じたり、作業のなかには学びがあることに気づき始めたりする様子がうかがえた。

中期段階における課題に対しては、次週の授業において行う作業について事前に説明したり、植えた野菜のサインボードづくりのために調べ学習的な時間を設けたりした。

これによって学生たちは作業の意味を理解し、脇芽をかいたり、雑草を抜いたり、害虫を駆除したりすることを「作業」という形式でとらえるのではなく、野菜を育てるために必要な「行為」であるということを認識し始め、「見つけた」、「発見」などといったキーワードが振り返りのコメントに現れ始めた。

後期段階における課題に対しては、「畑のスケッチ」を導入した。これによって学生たちは畑や野菜との距離を縮め、一つ一つの野菜の姿や成長が見えるようになってきた。

そして収穫の最盛期にあわせて「食べる」ということを通して生命や、自然とのつながりを実感しようと試みていったというのが昨年度の授業での実践であった。

〈この授業での学生たちの学び〉

学生たちによる授業アンケート評価では、授業における教員の準備や、実践に対する評価は高いものが得られた。しかし自己の体験を言葉にする大切さなど、学生自身の学びにおける評価は、全体と比較して低い値を示し、このことが次年度の課題であることが明白になった。

このことは大学の初年時教育として「大学入門」としての役割、つまり学び方の習得がこれからの学習を支えるものと考えたときに、与えた課題を楽しくこなす授業に満足していてはいけないと言えるだろう。

そのことを踏まえながら、今年度の授業をいかに工夫し、学生たちの学びを導きだすかが大きな課題となった。

2. 2012年度の授業実践

〈今年度の授業実践〉

シラバスでは「生きる・食べる」を授業テーマに明示し、

1. ガイダンス、自己紹介
2. 作付け会議
3. 作業計画

8〜9. 中間発表

10〜14. 作業&農カフェ

15. まとめ

16. 収穫祭（別途日時指定）他のクラスと合同で収穫したものでイベントを開催する。

といった計画で授業を展開することを予定した。

実際の授業展開は以下の通りであった。

①第1週目（4月19日）：ガイダンス、自己紹介

この時間の別クラスで紅花の種蒔きをしていたので、まずはその見学に行った。その後実際に自分たちが使用する畑を見に行き、講義室に戻り昨年度の授業についての実践の様子をパワーポイントで紹介し、各自が記入した「自己紹介シート」をもとに自己紹介も行った。

②第2週目（4月26日）：作付け会議

今回は、昨年のような各学部、各学科の横断的なクラス編成がおこなわれておらず、学科ごとの人数に偏りがあったので、教員側で5つの班に編成を行い、班内の自己紹介を行った。ただしこの班編成については、特に班単位の活動をするためのものではなく、デジタルカメラによる授業記録の収集や授業運営上の単純な割り振りにおいて運用することを周知させた。そのうえで班ごとに育てたい野菜を提案させ、より育ててみたい順にランキングをつけるよう指示をした。その後は各班で提案した野菜について「植え方」、「育て方」、「収穫」、「食べ方」について調べた。

③第3週目（5月10日）：作業計画

前期という授業期間での収穫を考慮すると、なるべく早い時期の植え付けが望ましいので、この日（5月10日）に畑の畝（うね）づくりと、苗の植え付けを行った。

④第4週目（5月17日）：作業&農カフェ

キュウリ栽培のための支柱とネット張りを行った。また雑草抜きや、トマトの脇芽かきなど、これから畑で日常的になる作業を実施した。

［写真1］キュウリ栽培の支柱設置

⑤第5週目（5月24日）：作業&農カフェ

雑草抜きや、トマトの脇芽かき、成長して伸びてきたトマト・ナスの枝に対する誘引を実施した。

⑥第6週目（5月31日）：作業&農カフェ

雑草抜きや、トマトの脇芽かき、成長して伸びてきたトマト・ナスの枝に対する誘引、筆や牛乳を使った害虫（主にアブラムシ）の駆除を実施した。

⑦第7週目（6月7日）：作業&農カフェ

雑草抜きや、トマトの脇芽かき、成長して伸びてきたトマト・ナスの枝に対する誘引、筆や牛乳を使った害虫（主に

［写真2］ 筆を使ったアブラムシの駆除

アブラムシ）の駆除を実施した。キュウリに最初の収穫があった。

⑧ 第8週目（6月14日）：作業＆農カフェ

雑草抜きや、トマト・カボチャ・キュウリ等の脇芽かき、成長して伸びてきたトマト・ナス・キュウリ・カボチャ等の枝に対する誘引、筆や牛乳を使った害虫（アブラムシ・アオムシ）の駆除を実施した。新しい作業としては、植えたスイカの苗の周りに柵を設けた。これは主に人に踏まれることを回避するものである。キュウリだけではなく、ズッキーニ・万願寺トウガラシ等の収穫も始まった。

⑨ 第9週目（6月21日）：作業＆農カフェ

雑草抜きや、トマト・カボチャ・キュウリ等の脇芽かき、成長して伸びてきたトマト・ナス・キュウリ・カボチャ等の枝に対する誘引、筆や牛乳を使った害虫（アブラムシ・アオムシ）の駆除を実施した。この週はメロンの苗の周りに柵を設けた。これも人に踏まれることを回避するものである。キュウリ・ズッキーニ・万願寺トウガラシ・ナス・ウマッコリー等も収穫した。

⑩ 第10週目（6月28日）：作業＆農カフェ

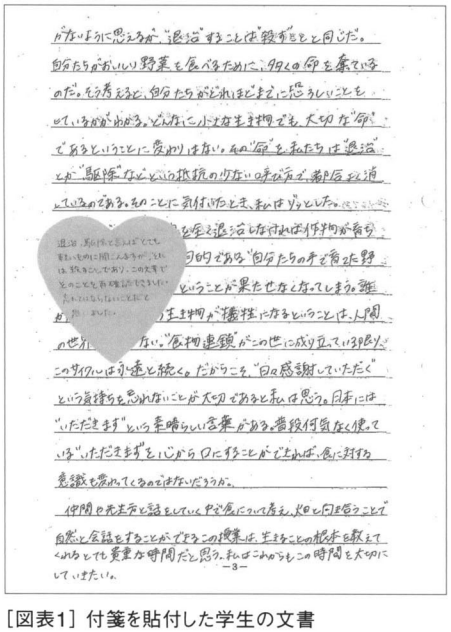
一通りの作業をした後で講義室へ移動し、『いのちの食べかた』（森達也著　理論社、2004。）を読んで要約し、自分の考えたことを書いてもらった。そのうえで他の学生と話し合うことで考えを深め、そこからさらに至った考えについて書き、その後の自分自身の考えについてスピーチ原稿を書いてもらい、数人の学生に発表してもらった。

⑪ 第11週目（7月5日）：作業＆農カフェ

作業を進めながら「農芸」ゼミナールの写真展に使う手の撮影を行った。撮影は「この授業で掴んだもの（気づき）」を手で表現するという内容のものであった。そしてこの手の表現が意味することについて600字程度の文章にして、次週の授業時に提出するよう指示をした。

⑫ 第12週目（7月12日）：農カフェ

天候が雨ということもあり、指示していた課題を提出してもらい、それをクラスの学生たち全員で共有する時間とした。学生たちには全員分の課題文書を読んでもらい、気になる文章や言葉には付箋を貼付してコメントを書き込むということを実施した。「いいね!」と思ったり、共感したことを言葉にして書いた本人に伝えてあげようというものであった。



［図表1］ 付箋を貼付した学生の文書

⑬ 第13週目（7月19日）：作業＆農カフェ

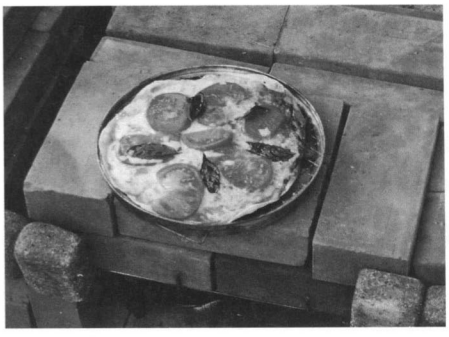
この日の主な作業は防獣対策であった。授業も終盤に入り、畑全体の後片付け等を考慮すると2度手間的な作業になるが、実った収穫物を責任持って食すという考えから、植えた野菜の周りを厳重にネットで囲った。また収穫物も増え、煮たり、焼いたり、味付けをしたりなど、いろいろな調理が登場するようになった。

⑭ 第14週目（7月26日）：作業＆農カフェ

この時期になると、一通りの作業を済ませて収穫と食べることが中心となってくる。

⑮ 第15週目（8月2日）：作業＆農カフェ

最後の授業ということで、レンガを使って作成した竈でピザを焼いて食べた。



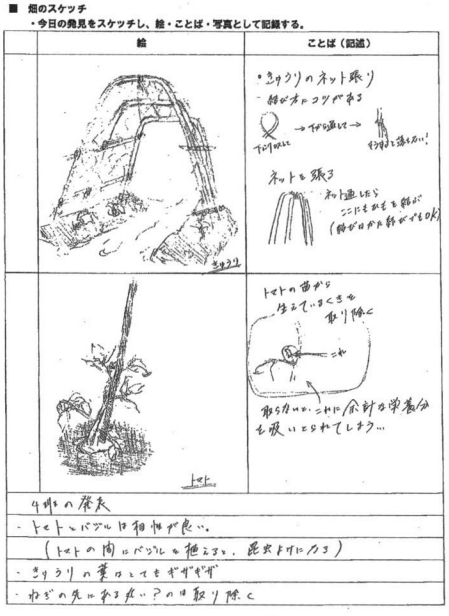
［写真3］竈で焼いた「自家製ピザ」

〈授業実践における工夫のポイントと学生たちのスケッチ〉

昨年度実施した「畑のスケッチ」は、時期としては授業の後半に行った。するとなかなか野菜の成長や変化に気づけなかった学生たちが、畑の地面に腰と視線をおとし、野菜に近づくことが出来るようになってきた。そしてこの描くという行為が、野菜の成長の過程を発見する一つのツールとして機能することが実感として得られた。そこで昨年度の初期段階における「実際の畑（野菜）の様子が見えていない。」、中期段階における「畑（野菜）のことを知らない。」、後期段階における「畑で起きていること（野菜の成長）が見えていない。」という課題に対して、今年度はあえて畑に野菜を植える前の初期段階から「農芸日誌」の裏面を使って「畑のスケッチ」を毎回実施した。一見すると何も存在しないと思える畑の環境から、何が見えてくるのかということについて検証することにもなると考えたからである。

授業の初期段階のスケッチには、野菜というより支柱の立て方や、紐の結びなど、作業内容に関する記述が多く見られた。

［写真4］「畑のスケッチ」の様子

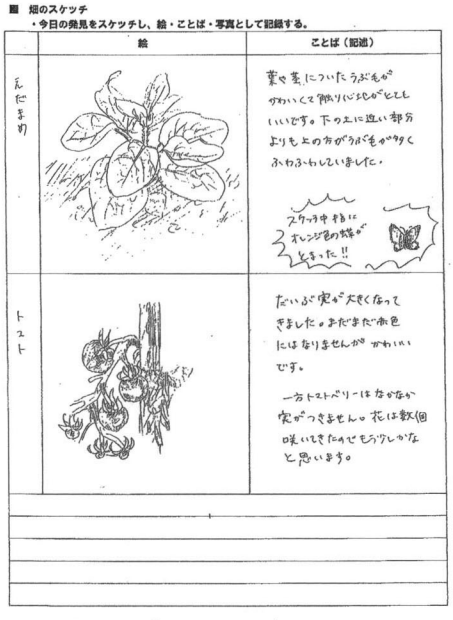


■ 畑のスケッチ
・今日の発見をスケッチし、絵・ことば・写真として記録する。

	絵	ことば（記述）
		・きゅうりのネット張り ・蔓がカールする →下から通して→ ネットを張る ネット通しから ここにもかを蔓が （蔓がのびた蔓がでもOK）
		トマトの茎から 生えてきたものを 取り除く 茎 葉っぱ、茎に余計な栄養分を吸いとられてしまう…

生徒の発表
・トマトとバジルは相性が良い。
（トマトの間にバジルを植える。虫よけになる）
・きゅうりの葉のようなものがザザザザ
・ねぎの先にある黒いものは取り除く

［図表2］初期の「畑のスケッチ」



■ 畑のスケッチ
・今日の発見をスケッチし、絵・ことば・写真として記録する。

	絵	ことば（記述）
えだまめ		葉や茎についたうぶげがかわいくて触りたくなるようなとしていいです。下の土に近い部分よりも上の方がうぶげがたくさんふわふわしていました。 スケッチ中にオレンジ色の蝶がとまった!!
トマト		だいぶ実が大きくなってきました。まだまだ赤色にはなりませんがかわいいです。 一方トマトペリーはなかなか実がつきません。花は数個咲いてきたのでもうすぐかなと思います。

［図表3］中期の「畑のスケッチ」

一通りの設置作業が終わる中期段階になると、野菜の成長に合わせるように野菜の姿や成長が記述されていった。

そして後期段階になると、野菜たちの中で生きる虫などの存在と、その生死に関する記述もされるようになっていった。

■ 畑のスケッチ
・今日の発見をスケッチし、絵・ことば・写真として記録する。

	絵	ことば（記述）
ジャガイモの花		・花びらは黄色で、根しべは黄色と先端に緑の ・1つの苗に沢山の花がついている。わりと小さめ。 ・すでに花ひらいている苗が多かったが、つぼみもたくさんあった。
オクラの葉のうら		・大量のアブラムシがいた。 ・テントウムシがアブラムシを食べつつ、卵を産んでくれていたので、まもなくたち、良いアブラムシ駆除の助っ人になってくれると思う。 ・少しも多めにつけ加えたが、テントウムシは大丈夫だとうです。（番藤さんいわく。）
日が経つにつれて、害虫を殺す量が増えてきたが、かしいい作物を育てるには厳しくなる所があるということを知った。		

［図表3］後期の「畑のスケッチ」

このスケッチの展開から推察できたことは、記述するという学習の方法がより能動的な視点で活動をとらえることにつながり、目の前で展開するさまざまな変化に気づけるようになったということである。また絵を描くだけではなく、ことばによる記述のスケッチも実施したことで、単なる野菜の形の書き写しではなく、より具体的な内容、つまり理解をともなった事実の観察に発展していったとも考えられる。このことに関しては、授業の第11週目に課題とした学生自身の記述の中にも

(a) 農業日誌を見直してみると、畑仕事を開始したばかりのころと最近では、文章量的にも内容的にも大きな違いがみられる。特に「今日の発見」と「畑のスケッチ」は違いが顕著だ。これは私が畑仕事で成長している証だと思う。
(b) 私が農芸の授業で掴んだものは、「観察力」です。初めは野菜の少しの変化や違いなどにまったく気づきませんでした。でも、毎回のスケッチや発見を書き記すことで、野菜について見えなかったことや、細かいことにだんだん気づけるようになりました。野菜だけでなく、人とのコミュニケーションや配慮などにも以前に増して気づけるようになったのではないかと思います。野菜を観察しているうちに、周りを見る視野も広がったと思います。

といった記述があり、さらにはこのことが場の状況の理解や、野菜への愛情や、他者への思いやりにつながったと感じている学生もいた。

次に指導教員にとって昨年度は初の授業実践であったため、天候や野菜の成長などの自然状況に左右されてしまうことなど予測が難しく、先を見通した活動というものが困難であった。そのような状況の中で出現した、昨年度の初期段階における「意欲の出し方がわからない。」、「作業の工程が見えていない。」、中期段階における「事前理解ができていない。」、「作業の意味を理解していない。」、後期段階における「作業の意味が見えていない。」という課題に対して、今年度は一方的な指示を与えるだけにならないよう配慮した。具体的には「農芸日誌」などへの記入を利用して、これから畑で行う作業を学生たち自身が見つけ出し発表しあうということを授業の開始時に実施したりした。そしてこれに対応して農業の経験者からのアドバイスを受け、作業の内容や方法などを確認しながら進める機会を設けた。

これによって学生たちの取り組みは、教員からの指示待ちで作業を行うことから、徐々に畑の状況を見て必要な作業を自らが見出すことを少しずつ学んでいったように思う。しかし学生たちにとっては未知の部分が多く、農業経験者である斉藤登久女史（以下、斉藤さん）の存在は重要な役割を果たした。異年齢世代である斉藤さんに話しかけ、教えを乞い、畏敬の念を持って耳を傾ける学生たちの姿は、まさに学ぶ姿勢であったと見受けられた。また前述の「畑のスケッチ」でも触れたように、視野の広がりと観察の深まりが、徐々に学生たちに畑で必要とされる作業の気づきにもつながっていったと考えられる。

また昨年度の後期段階における「本気の愛着や責任感が育っていない。」という課題に対しては、どこまで学生たちに責任を分担させるかということを思案したりした。しかし、畑の作業全体をクラス全員で共有できるような授業運営を優先し、あえて強制的な責任の分担は行わずに今年度も実施した。

しかし毎回の「畑のスケッチ」や観察の中で、また食すという体験を通して自然な形で愛着の気持ちを深めることは多少できたように思う。そのことは、たびたび訪れた授業時間外の畑で、水やりに来ていたり、収穫に来ていたりする

学生の存在があったということが多少の証明にもなるかと思う。このようなことは昨年度の授業では一度もなかったことである。

3. 学生たちの学び

〈展示会用提出課題「この授業で掴んだもの（気づき）」を使った取り組みからみえてきた学び〉

この教養ゼミナール「農芸」の授業展開を報告する展示会を計画し、2名のファシリテーターの構想のもと「手の写真」と「文章」を展示することとした。そのねらいは、（以下ファシリテーター作成文）「学生が土を耕し収穫するという行為自体はこの授業の手段であり、目的ではありませんので、この"農業"という手段を通して、学生がなにを得たのか。という成果をここで展示発表できたらと考えております。」ということであった。

［写真5］2012年教養ゼミナール農芸 授業報告展
タイトル：「ここでは知ったかぶりは通じない。」

そのためにまず学生たちには、これまでの授業での体験を振り返り「あなたにとってこの授業で掴んだもの（気づき）は何でしたか?」また「それはどんな作業や体験から得られましたか?」の2点について考えを指定のプリントに記述してもらった。そして提出した文書を「それはどんな作業や体験から得られましたか?」の部分を手で表現してもらい写真で撮影した。

さらに第12週目の本授業においては『いいね!　ワードアワード』と称して、この課題として提出した文書を学生たち全員（欠席者2名を除く24名）が読み、書かれた文書の中から「ここがいいね!と思った言葉（文章）をほめてあげましょう♡」という試みを実施した。

［写真6］「いいね!」コメントを書き込んだ付箋

このなかで一番多くの学生たち（23名中10名）が「ここがいいね!」と共感を示した3つの文章が、

（a）人間は一人で命を育てる事は出来ないし、一人で命を食べずには生きていけない。私たちは他者から食べ物という命のバトンを受け取って、前に進む、生きている。壮大な命のリレーをしていると思った。
（b）食べ物たちを「かわいそうだから食べない!」なんてことも出来ません。食べ物に対して命を考えることが出来るのならば、手をあわせてたくさんの感謝をしていただくことが良い方法だと思います。
（c）人によって気づくことや感じたことが違うので、クラスの人たちの発表を聞いて新鮮な気持ちになる。心が豊かになる授業だと思った。

であった。

これらのことから推察できるのは、授業テーマとして掲げた「生きる・食べる」の下で行った毎時間の農カフェにおいて、学生に自分の考えや発見を発表してもらったり、他者の考えを聞いたりしたこと、『いのちの食べかた』を読んでの意見交換を学生間でしたことなどで、さらに「食」や「命」に関する考えを深めることができたのではないだろうかということである。その実感をこの文章を書いた学生と、それに共感した10名の学生たちが「心が豊かになる授業」と感じ

ることにつながっていったのだと思われる。

次に多い8名の学生たちの共感を得た文章は、

(a)どんなに小さな生き物でも、大切な“命”であるということに変わりはない。その“命”を私たちは“退治”とか“駆除”などという抵抗の少ない呼び方で、都合よく消しているのである。
(b)「育てていた」つもりが実は私たちが「育てられていた」。

であった。

ここではやはり畑の中で起こっている「生」と「死」というものを、学生たちがより関心を持って捉えていたことが伺える。そしてここでの気づきというものが、自分たちに学びをもたらしていることを感じたことから「育てられていた」という言葉になったのだとも考えられる。

この他に6名の学生たちの共感を得た文章は、

(a)いただきます”という言葉は「あなたたちの命を私の命にさせていただきます」という意味からきているという説があるそうです。
(b)命を育てるのと同時に私は命を殺していた。
(c)その行為が当たり前なってしまってはいけないのだと思います。何故なら私は野菜たちが毎週毎週違った大きさになったり、どのくらい実をならせたかの過程を見てきているから野菜も命だと感じることが出来たのです。

であった。

また(c)と同様な考えとして

(c')畑での様々な体験は、私にそれらのような“当たり前”を再確認させてくれたように感じます。“当たり前”を“当たり前”と思いながら暮らしているままではいけないのだとその時はっきりと気づきました。(3名が共感)
(c")「自分たちは命に支えられているのだ」という当たり前だけれど忘れがちだったことに目を向け、改めて感謝をする素晴らしい機会をもらいました。(2名が共感)。

といった文章もあった。

やはりここでも「命」、「死」という言葉がキーワードとして登場するが、特に注目したいのは「当たり前」という言葉である。今まで当たり前で片づけていたことに意味や理由のあることに気づいたと言えるのではないだろうか。第10週目の授業の中で読んだ資料である『いのちの食べかた』(森達也著　理論社、2004)の一節に
「でも僕らは、とても忘れっぽい。

言い換えればすぐに、目の前の現象や今の環境に慣れてしまう、それが当たり前になってしまう。これを思考停止という。」[1)]

という文章がある。学生たちはこの授業を一つのきっかけとして、知らないで済ませていたことに対して思考を開始したということも考えられる。今まで麻痺していたり、矛盾していたりしたことに気づき、考えるきっかけになったということ、つまりここに学生の学びが発生したということではないだろうか。

このように授業全体としては、到達目標として掲げた『“「土を耕し、生命を育てる」ことを通して、自然を五感で感じ、自分が生きていること、自分が自然の一部であり、他の生命とつながりあっていることを実感する。

そうした生命自然の実感を基盤にしながら自己や芸術デザインについて考え、考えながら土を耕して自然と対話し、思考を深め、自己を確立していくことを目的とする。”であった。』に対しては十分な体験を提供する機会とすることができたのではないだろうかと推察される。

4. まとめ

佐伯胖は、“「学び」の構造”(東洋館出版社、1975)において、学びを「学びのひろがりと高まりの諸段階」として六段階に分けてそのありさまを述べている[2)]。

第一段階は、最もひくいレベルの「学び」であり、言われた通りのことを全くの受動的におぼえる作業をやってみるにすぎない段階である。これはこの授業において教員の指示があった時だけにその作業を意味もなくこなしているような状況のことであると考えられる。

第二段階は、「学ぶ側」に一種の目標があり、その目標

に直接関係のあるものだけを選択して「学ぶ」状態である。これはまだ低いレベルの「学び」であり、この授業においては「雑草をとっていよう」、「脇芽をかいておこう」などということを自分で選択し、教員からの注意を受けないようにとりあえず自分で選んだ作業を進めるといった状況のことであると考えられる。

第三段階は、「目標自体を探す」はたらき=「知的好奇心」の芽が生まれてくる段階である。この段階では、たとえ「矛盾」が発見されたとしても、その解消を目指すような取り組みはなく、自分なりの視点のなかで畑の作業や、野菜の成長を理解できるようになってきた状況のことであると考えられる。これは「畑のスケッチ」を通して得られた学生たちの言葉からも、比較的充実させることが出来たことがうかがえる。

［写真7］斉藤さんに教えを乞う

第四段階は、「より深くものごとを納得する」段階であり、「新らしい（本文のまま）知識」の確かめに他人の目（別の視点）を持てるようになるということである。この段階において今まで当たり前だと思っていたことがそうではなかったという「疑問」として意識されるようになった状況であると考えられる。これに関しては、展示会用提出課題「この授業で掴んだもの（気づき）」のなかに多くの共感を得た「当たり前」を再認識するという変化が、この段階に到達している学生が授業の中で出現し始めたということの表れであると考えられる。

第五段階は、第四段階では意識されただけで終わった「疑問」に対して、「新らしい一貫性」を生み出す段階である。ここでは「もしかしたら自分が今まで当然と思っていた前提がまちがっているかもしれない」という可能性を認めながら、新らしい一貫性を自分で生み出す形で「納得」するものである。この段階の学びにこの授業が達することが出来たかはまだまだ検証の余地があるが、第12週目に行った「ここがいいね!と思った言葉（文章）をほめてあげましょう♡」という試みが、この学びを生み出す可能性をもっているということが考えられる。

第六段階は、世の中の種々な現象や問題の中から、新らしい視点を発見したり、自分自身で新らしい視点を生み出したりしながら、「新らしい一貫性」をつくりだす。この段階までくれば対話しつつ考えが深まり、考えを深めつつ対話し、対話を超えるものへとひろがりと高まりをもった「学び」となるというものである。もはやこの授業における学生たちがこの段階に達することが出来たのであれば、単なる「農作業」を体験したり、覚えたりするような「学習」ではなく、畑という学びの場で「畑は私の質問に無言で答えてくれた気がする」（2名の学生が共感した文章）というように、他者とのコミュニケーションや自然からの発見を通して深い「学び」が展開されていくのであろう。そして「学び」がこの段階に達することが出来れば、さらに学生自身の思考の基盤としてひろがりをもった「学び」の可能性を秘めていると考えている。

5. おわりに

まだまだこの教養ゼミナール「農芸」の授業を通した学びが、今後の大学での学習にどれほどの効果をもたらすかはさらに継続的な調査、検証が必要である。しかし本授業を担当した柳川の実感としては、単なる知識の暗記によって農作業を効率的に実行できるようにする「農業」を学ぶのではなく、畑という身近な自然に対して問いかけ、そこから学びとるという体験をする「農芸」は、これからの学習の場面において好奇心をもって取り組む姿勢や意識を持つきっかけとすることが出来ると考えられた。簡単に言ってしまえば、大学の授業は能動的なものであるということを知り得る機会として重要な役割を果たせるということでもある。

そして今後はこの授業の中で、仲間たちとの対話、教員やその他の大人たちとの対話、野菜との対話、畑との対

話、自然との対話など、多くの対話を生み出すことをさらに展開していくことも重要な要素であると考えた。そしてこの畑での体験や経験をこれからの大学でのそれぞれの学習や、世の中の様々な事柄と結びつけながら、自己を新しい世界に導いていくような能動的な学びへと導いていけるようなひろがりと高まりにつなげることが出来れば、さらに意味のある授業とすることが出来ると考えた。そのためにも、またさらに教員自体もさまざまな模索と試みを展開し、学生自身が能動的に授業に参加し、大学での学習をより積極的に展開し学びを深めるきっかけとなるような実践ができるようにしていきたいと思う。

しかしその学びの可能性への期待がもてる一方、その学びに与える影響においてはまだまだ未知であるのがこの教養ゼミナール「農芸」である。また実のことを言うと、準備やあと片付け等で時間外の生活も影響を受ける大変重い負担となるのがこの授業でもある。しかしながら2年にわたる指導の経験を通して、さらに来年度の開講を楽しみにしている充実した授業であるというのも正直な気持ちでもある。

引用・参考文献

1）. 山森達也「いのちの食べかた」理論社、2004。P46

2）. 佐伯胖「「学び」の構造」東洋館出版社、1975。p175～180

参考文献

1. 森達也「いのちの食べかた」理論社、2004

2. 佐伯胖「「学び」の構造」東洋館出版社、1975

［執筆者］

柳川 郁生

Ikuo YANAGAWA

教養教育センター

Center for Liberal Arts

准教授

Associate Professor